

指導資料

音楽 第29号

— 小, 中, 高, 盲・聾・養護学校対象 —

鹿児島県総合教育センター

平成14年10月発行

郷土素材の教材化を通した音楽科の学習指導

今年から小, 中学校の新学習指導要領が本格実施となり, 特に中学校では, 3 学年間を通じて1種類以上の和楽器を用いることが明示された。また, 可能な限り, 郷土の伝統音楽や伝統芸能を取り入れることが示されている。

このような流れを受けて郷土素材の教材化の取組が多く見られるようになってきている。一方, 平成13年度に当センターが実施した郷土学習に関する実態調査によると, 「どのような素材を教材化すればよいのかが分からない」「教材化の仕方が分からない」「意欲的に取り組ませるためにはどのように指導していけばよいか」などの課題が依然として多く挙げられている。

そこで, これらの声にこたえて, どのように教材化を進めればよいかを中心に述べる。

1 どのような素材を教材化すればよいか

(1) 郷土の音楽的な素材

本県は, 南北約600kmという広大な県土を有し, 郷土の音楽も多種多様に存在する。また, それぞれの音組織, リズム, 旋律, 楽器の音色・奏法・構造なども多様である。

具体的には, 遊び歌などのわらべ歌・子

守り歌・民謡がある。また, 各地に伝わる太鼓踊り, 棒踊り, 鎌踊り, 鈴かけ馬踊り, 八月踊りなどの伝統芸能がある。さらに楽器としては太鼓, 鉦などの打楽器, 「天吹」, 「篠笛」などの管楽器, 「三線」, 「薩摩琵琶」, 「ゴッタン」などの弦楽器がある。これらの中には鹿児島独特のものも多い。これらの素材を各学校段階の特質に応じて取り上げ, 教材化することができる。

(2) 素材の検討

次のそれぞれの視点から検討する。

視点1 その素材は, 児童生徒を取り巻く地域に今も生きているか。

日本の伝統音楽及び郷土の音楽の学習では, 幼い頃から見聴きした経験や, 伝承にかかわる人との交流によって, 学習への意欲が高まり, リズムや旋律の把握や演奏技能の習得を確かにする。直接生の演奏を聴いたり, 伝承者から音楽の背景について話を聞いたりすること, さらに, 学習後に生活の中で伝統行事に参加するなど継続して郷土の音楽にかかわることが大切である。

視点2 児童生徒の発達段階に適しているか。

この視点を検討するに当たっては、どのように扱うか、どこまで扱うかを併せて考えていく必要がある。リズム、旋律など音楽の感受力や技能に関する発達、興味・関心などの情意面の発達等を考慮し、拍節的であるかそうでないか、旋律の音型が明確で把握しやすいか、曲の長さはどうか、演奏技能の難易度、表現されている内容への理解度はどうかなどいろいろな角度からの検討が必要である。(図1参照)

視点3 教科の目標・内容に照らして、どのような成果が上げられそうか。(学習内容の洗い出し)

この視点では、教科の目標、内容に照らして検討するために、マトリックス表を作成し、郷土素材の教材一覧としてまとめておくといよい。

視点4 児童生徒自身の創意工夫が期待できるか、他教材の学習への発展が期待できるか。

郷土の音楽そのものを学習する伝承の学習と、郷土の音楽や楽器の特徴を生かして創作に

取り組む学習が考えられる。例えば、日本の音階による短い旋律を創作したり、同じ発音原理や似た構造をもつ楽器の演奏作品を鑑賞したりするなど、児童生徒の創意を生かし、広がりのある学習が展開できるものであることが大切である。

2 どのように教材化を進めるか

(1) 採譜、取材等の方法と留意事項

ア 楽譜の取扱いについて

伝承には、楽譜は用いられないものが多い。楽譜(特に五線譜)は、あくまでも参考資料である。採譜、記譜についてもこぶしなどのメリスマを削って、核となる旋律だけを抜き出す。本物を聴くこと、模倣することを中心に学習を進めることが望ましい。

<楽譜例>「鹿屋市菰川の棒踊り」



		民謡			伝統芸能			楽器			重点的な学習活動
								管	絃	打	
小学校	低学年	わらべ歌									A B F H I
	中学年										A B C F G H I
	高学年	子守り歌									A B C G J K N
中学校	中学校		祭り歌	労作歌		太鼓踊り・八月踊り	棒踊り・鎌踊り	篠笛	天吹		A B C E G J K M N
	高等学校			座興歌					薩摩琵琶	ゴッタン	A D L N

＜学習活動＞
A 聴く、見る(メディアを通して、生の演奏を)
B 歌う C 代用楽器(リコーダー、オルガンなど)による演奏 D 本物の楽器の演奏体験
E 模擬楽器による演奏 F 身体表現 G 踊る
H リズム遊び I ふし遊び J リズム創作 K 旋律創作
L 様式による創作 M 楽器の製作と音の探究(模擬楽器を含む)
N 知る、理解する(曲の由来、伝承の様子、楽器の構造、楽器の奏法)

図1 各段階で扱える郷土素材

イ 採譜や取材について

- ・ 伝承者の演奏を録音する。
- ・ 地域の伝統行事の様子を録画する。
- ・ 地域の人にその素材にまつわる話を取材する。(いつごろから、どのような形で伝わっているのかなど)
- ・ これまでの文献や資料を活用する。
すでに楽譜となっているもの、音楽や楽器の由来が示されているものなど参考となる文献を活用する。

ウ 編曲上の留意事項について

- ・ 児童生徒の発達段階や実態を踏まえ、歌唱に楽器を加えるなど個に応じたパート編成ができるようにする。
- ・ 重ねる場合はカノン(輪唱・輪奏)、オスティナートにしたりするなど日本の音楽の響きを損なわないようにする。伴奏については、左手は核音、右手は構成音を重ねるなどの工夫をする。
- ・ 必ず自分で何度も演奏し、修正を加えることが大切である。

(2) 年間指導計画への位置付け

郷土の音楽についても意図的、計画的、系統的に指導が行われるように、年間指導計画にしっかり位置付けることが大切である。新たな単独題材として位置付ける場合も考えられるが、時数も削減されていることを考慮すると、これまであった題材にどのように位置付けていくかを検討することが有効であると考え。

3 どのように指導するか

郷土の音楽を指導する場合のポイントに

ついて述べる。

(1) 学習指導の展開について

元来、郷土の音楽及び日本の伝統音楽は、楽譜を用いず口伝によって人から人へと伝承されてきたものが多い。また、繰り返し模範が示され、それを模倣して体全体で習得するという形で伝承されてきている。音楽の授業でも全体を通して模倣的に習得することを中心としながら、難しいところ、ポイントとなるところを取り出して指導するようにする。

(2) 楽器の特性を生かした導入の工夫

ばちさばき、運指など奏法の習得に、それぞれこれまで培われてきた方法がある。例えばドンコン、テンツクなど唱歌(しょうが)を用いたり、それぞれの楽器独特の楽譜を用いたりするなど、地域の伝承者や指導者に取材を行い、それを踏まえて指導法を工夫する。以下に和太鼓の例を示す。

ばちさばきとリズム	言葉掛けなどの働き掛け
両手で交互に R 2 L 4	「歩くように」 ドンコン、ドンコン
↓	↓
分割のリズム R 2 L 4	「駆け足」 ドコドコドコドコ
↓	↓
多様なリズム R 2 L 4	「スキップ」 ドンコドンコ
↓	↓
R 2 L 4	ドコンコ、ドコンコ

(3) 地域人材の活用と、それぞれの専門性を生かした指導

本物を聴く、生演奏で聴く、由来を聞くなど、学習への興味・関心を高めたり、感動的に学習できるようにしたりするためには地域の人材を講師として招聘し活用していく

ことが求められる。

その際、事前に学習のねらい、児童生徒の実態などを十分に伝え、音楽科教育の専門性、学校教育の専門性を生かした教師の指導によって地域の人材の価値を十分に引き出す働き掛けを行うことが大切である。教師の役割としては、右のようなことが挙げられる。

以下に、展開例を示す。

< 題材の展開例 >

- ・ 地域の方の言葉を補う。
- ・ 図や絵、楽譜など視覚的にとらえられるような資料を提示する。
- ・ 児童生徒がポイントとなるところに着目できるように、取り上げて強調する。
- ・ 質問事項を取り上げたり、つまずきとなりそうなところを児童生徒に代わって質問したりする。
- ・ 子どもの注目すべき姿を取り上げて紹介する。
- ・ 個々の児童生徒の活動の様子を見取って地域の方に知らせたり、地域の方が個々の子どもに指導している様子を他の子どもたちに紹介したりする。

過 程	時間	主 な 学 習 活 動	教 師 の 具 体 的 な 働 き かけ
触れる	1	1 地域の「〇〇太鼓」についてVTRを鑑賞する。(間接交流) ・ 演奏の様子 ・ 曲の背景や伝承の様子についての説明	・ 「〇〇太鼓」についての興味・関心を高めるとともに、概要を把握できるように、あらかじめ演奏風景や地域の伝承者の説明を録画しておくようにする。特に、地域で伝承してきた思いが汲み取れるような内容に組み立てておくようにする。
つかむ	1	2 基本的なリズムパターンを練習する。(直接交流) ・ ばちの持ち方、構え方 ・ リズムパターンの模倣	・ 伝承者に来校してもらい、ばちの持ち方や構え方、基本的なリズムパターンを直接指導してもらうようにする。 ・ リズムや奏法についての理解が深まるように、「難しいところはないか」や「質問したいことはないか」などの発問をし、伝承者に答えてもらって、補説を加える。
深める	2	3 全体を通して繰り返し、練習する。 ・ 範奏を模倣して ・ 唱歌(しょうが)を唱えながら 4 範奏を聴いて音楽の特徴を感じ取り表現を工夫する。 ・ 強弱や速度の変化 ・ アクセント ・ 微妙なリズムのニュアンスなど リズムパターンを基にした創作へと発展させることもできる。	・ リズムを把握しやすいように、リズムパターンと唱歌を書き込んだカードを掲示するようにする。 ・ 楽器の数が不足する場合は、古タイヤや絨毯の切れ端を丸めたものなどを準備し、ばちさばきを練習できるようにする。 ・ 伝承の方法を参考にして、全体を通して練習することを基本に据え、繰り返し練習する中で体全体で感じをつかんで打てるようにする。 ・ 更に感じを生かした表現ができるように、再度範奏を聴き、強弱や速度の変化、リズムのニュアンスなどの音楽の特徴について気付いたことを発表し合うようにする。
分かち合う	1	5 個やペア、グループで発表し、表現について話し合う。	・ 成就感や達成感を味わえるようにお互いの演奏のよさを出し合ったり、教師や伝承者が価値付けたりするようにする。
広げる	1	6 全員で演奏して、学習のまとめをする。  もっと練習して地域の行事に参加したいな	・ 郷土の音楽のよさを実感し自分も練習して伝承に加わりたいという思いをもてるように、行事への参加の仕方、練習方法などを紹介したり、できるようになったことや家族や身の回りの人々に聞いたことなどを発表させたりする。

【参考文献等】

日本学校音楽教育実践学会編『日本音楽を学校で教えるということ』平成13年 音楽之友社

山内雅子著『日本音楽の授業』平成13年 音楽之友社

(第三研修室)